

生ける神に仕えるダニエル（2）

2009. 1. 27 (火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ダニエル書 1章1節から21節

ユダの王エホヤキムの治世の第三年に、バビロンの王ネブカデネザルがエルサレムに来て、これを包囲した。主がユダの王エホヤキムと神の宮の器具の一部とを彼の手に渡されたので、彼はそれをシヌアルの地にある彼の神の宮に持ち帰り、その器具を彼の神の宝物倉に納めた。王は宦官の長アシュペナズに命じて、イスラエル人の中から、王族か貴族を数人選んで連れて来させた。その少年たちは、身に何の欠陥もなく、容姿は美しく、あらゆる知恵に秀で、知識に富み、思慮深く、王の宮廷に仕えるにふさわしい者であり、また、カルデヤ人の文学とことばとを教えるにふさわしい者であった。王は、王の食べるごちそうと王の飲むぶどう酒から、毎日の分を彼らに割り当て、三年間、彼らを養育することにし、そのあとで彼らが王に仕えるようにした。彼らのうちには、ユダ部族のダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤがいた。宦官の長は彼らにほかの名をつけ、ダニエルにはベルテシャツアル、ハナヌヤにはシャデラク、ミシャエルにはメシャク、アザルヤにはアベデ・ネゴと名をつけた。ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。神は宦官の長に、ダニエルを愛しいつくしむ心を与えられた。宦官の長はダニエルに言った。「私は、あなたがたの食べ物と飲み物とを定めた王さまを恐れている。もし王さまが、あなたがたの顔に、あなたがたと同年輩の少年より元気がないのを見たなら、王さまはきっと私を罰するだろう。」そこで、ダニエルは、宦官の長がダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤのために任命した世話役に言った。「どうか十日間、しもべたちをためしてください。私たちに野菜を与えて食べさせ、水を与えて飲ませてください。そのようにして、私たちの顔色と、王さまの食べるごちそうを食べている少年たちの顔色とを見比べて、あなたの見るところに従ってこのしもべたちを扱ってください。」世話役は彼らのこの申し出を聞き入れて、十日間、彼らをためしてみた。十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。そこで世話役は、彼らの食べるはずだったごちそうと、飲むはずだったぶどう酒とを取りやめて、彼らに野菜を与えることにした。神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を悟る力と知恵を与えられた。ダニエルは、すべての幻と夢とを解くことができた。彼らを召し入れるために王が命じておいた日数の終わりになって、宦官の長は彼らをネブカデネザルの前に連れて来た。王が彼らと話してみると、みなのうちでだれもダニエル、ハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤに並ぶ者はなかった。そこで彼らは王に仕

えることになった。王が彼らに尋ねてみると、知恵と悟りのあらゆる面で、彼らは国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっているということがわかった。ダニエルはクロス王の元年までそこにいた。

先週始めたテーマについて、今日も続けたいと思います。即ち「ダニエル」について、考えたいと思います。ダニエルは、いったいどのような男だったのでしょうか。異邦人である王は言ったのです。

ダニエル書 6章20節後半

「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神…。」

ダニエルは、生ける神を信じただけではなく、たまに生ける神に仕えたのでもなく、いつも仕えていた人でした。そしてダニエル書を通してはっきり分かることは、彼は、どのような状況に置かれていても主に仕えた男でした。主のために生きたいと切に望んでいた男でした。どのような状況に置かれているときでも、私たちは主に仕えることができるのでしょうか。ダニエルのように獅子の穴にいるとき、悪魔が勝利を握っているかのように思われるときこそ主をよりよく知ることになるということが、主の導きの目的です。

ダニエルが一番の特徴は、祈りだったでしょう。主の呼びかけは、「わたしを呼べ。そうすれば、わたしは、あなたに答え、あなたの知らない、理解を超えた大いなる事を、あなたに告げよう」です。これこそ、エレミヤに与えられた約束でしたが、ダニエルも、このエレミヤに与えられた約束をもちろん知っていただけでなく、自分のものにしました。

ダニエルはどのような人だったか。その答えは、「祈りの人」でした。生けるまことの神は自分の祈りに応えてくださるということ、彼は何回も何回も経験しました。ですから、自分の身に危険を及ぼすことになる計画を聞いたとき、彼は心配しないですべてを主にゆだねることができたのです。

同じように、ペテロもこのような態度をとるべきであると思い、当時の迫害されていた兄弟姉妹に書き送ったのです。

ペテロの手紙・第一 5章7節

あなたがたの思い煩いを、いっさい神にゆだねなさい。神があなたがたのことを心配してくださるからです。

もし生けるまことの神が心配してくださるならば、自分で心配することはありませんし、心配することはおかしいのではないのでしょうか。ダニエルは、思いわずらいをすべて主にゆだねました。ダニエルを妬む人々はダニエルが主に祈ることを知っていましたので、王以外のものを拝んではならないという、ずるい法律を作ったわけです。ダニエルが主の御前に祈っているところ（即ち、彼らの作った法律を破っているところ）を、彼らは見つけました。ダニエルという男は、隠れた信者でいるよりは死んだほうがましだと思ったのです。何があっても妥協しません。ダニエルは全く恐れを持っていなかったのです。それは、

「主を恐れた」からです。身の危険を覚えて、自分の高い地位を捨てて逃げようと思ったなら、それもできたはずですが。窓を全部閉めて押入れの中で、誰も見ていないところで、声を出さずに心の中で祈ろうと思えばできたのです。そうすれば、捕えられなかったし、問題にならなかったでしょう。けれどダニエルは、その態度をとると主は喜ばれないと思ったので、そのようにしなかったのです。

彼は獅子のような性格の持ち主だったと言っても良いかもしれませんが。獅子よりも勇気を持っていました。窓を開け放して、両手を挙げてエルサレムに向かって祈るのは、彼の習慣でした。毎日毎日そうしたのです。そうしないと主は喜ぶことがおできにならないし、お働きになることもできないし、ご自分の大いなるみわざを明らかにさせることもできないと分かったからです。大胆に窓を開け放して祈るということは、ダニエルが一時的な衝動にかられた、「から元気」でしたことではなかったのです。彼はそのとき少なくとも70何歳かだったのです。救われたばかりの青年ではなかったのです。ですから、よく考えた、成熟し切った者の判断でした。

共にバビロンに囚われていた同胞にとっては、何という素晴らしい証しだったことでしょう。ダニエルは、公に祈り、公に証しし、人の誉れを少しも望まなかったのです。結局、主を恐れたからです。今の全世界の状況はちょうど逆です。主を恐れる畏れがありません。オバマの最近言っていることは、子どもは墮ろしても良い、と。いったいどういうことなのでしょう。戦争をしてはいけないけれど子どもは殺しても良い、とは。同じことではないですか。大変な速さで今の世界はおかしくなっています。意味は、「主は近い」。私たちは大いに喜びましょう。

ダニエルのとった態度を通して、私たちは何を学ぶことができ、何を汲み取ることができるのでしょうか。ダニエルは、若いときから自分を主にゆだねたのです。私は主のものです。私は主のために生きたい。彼は心からそう思ったのです。どうしてかと言いますと、主を体験的に知るようになったからです。主は生きておられる、祈りを聞いてくださると分かったからです。若いときから主に仕えていたのが、ダニエルでした。どうして主に仕えたかと言いますと、「主を恐れた」からです。ダニエルにとってそれは決して簡単ではなかったのです。環境は異邦の国でした。イスラエルから連れて来られ、異邦の教育を受けなくてはならなかったし、文化も全部異邦のものでした。けれどまことの神を恐れる恐れは、ダニエルに異邦のものと妥協することを避ける勇気と力を与えました。主を恐れる恐れから、彼は主のことばを破ることを恐れたのです。聖書は、みことばは「神のことば」だと彼は確信していました。一つ一つのことばは主の靈感によって書かれています。それを認め、また従順に従うなら、大いに祝福されます。主に対する全き服従には素晴らしい豊かな恵みが伴います。

ダニエル書 1章 15節をもう一度お読みいたします。

ダニエル書 1章 15節

十日の終わりになると、彼らの顔色は、王の食べるごちそうを食べているどの少年よりも良く、からだも肥えていた。

と書かれています。これこそ祝福だったのです。多くの人は、目的のためには手段を選ばずで、目的に到達できれば少しくらい妥協しても、方法は何でもどうでも良いではないか、と考えています。ダニエルはそのようなことをしませんでした。その結果がどうであろうと、主を恐れる恐れを持ち続けることこそ大切だ、と彼は確信したのです。もちろん、私たちは結果を見る必要はありません。日々主の御声を聞き、それに従って行くことだけが大切です。結果がどうであろうと、たとえ悪くても主が責任をとってくださるはずです。

ダニエルは、絶えず主にだけ従いました。ですから結果を少しも恐れなかったのです。私たちも主に頼ると、主に仕えようと、確かにいろいろな面白くないことが次々に出てきますが、主にゆだねることができますので、必ず、主は恵んでくださるに違いありません。

このダニエルのとった態度を通して何を教えられるかと言いますと、いのちをかけてすべてをささげる、また仕えていく価値のある主は、ダニエルの主であられるだけでなく、私たちの主でもあられます。ダニエルはそのように深く心から主をあがめていましたので、主を裏切るよりは獅子の穴に投げ込まれるほうがましだと思いました。これからみても、主は自分のいのちをささげても惜しくない尊いお方だと思って、信じて仕えていたダニエルの心が良く分かります。彼の願いは、絶えず主との交わりを持ち、一つになっていることでした。私たちにとっても、主はいのちをささげても悔いのないほど価値あるお方となっているのでしょうか。

主を知るようになった兄弟姉妹は、次のように証しします。「私たちが罪人であったとき、主はまず私たちを愛してくださいました。大いなる恵みにより私たちの罪を赦されました。主は私たちを絶望の穴から、堅い岩の上に救い出してくださいました。しもべとなられ、私たちを救われた主は、私たちが地上で生きるわずかの間もあらゆる試みから守ってくださいと約束しておられます。私たちも、この主のために、残るわずかのときを常に生けるまことの神に仕えていきたいと思えます」と。

イエス様は私たちにとってどのような価値があるのでしょうか。ホセア書の中に次のようなことばが書き記されています。

ホセア書 5章12節

「わたしは、エフライムには、しみのように、ユダの家には、腐れのようになる。」

主は、イスラエルの民に言わざるを得なかったのです。

イエス様が私たちのいのちとなっているかどうかの問題です。私たちはダニエルのようにひたすら主を愛し、主に仕えようと思っているのでしょうか。或いは、私たちは自分の名誉や立場を考え、妥協してうまく通り抜けようとするのでしょうか。それとも、ひたすら主にだけ仕えようとしているのでしょうか。もし主の御名のゆえに苦しみに会うなら、それを喜びとするのでしょうか。主に絶えず仕えることは私たちの喜びであり、そのことを心から言い表わすのを主は待っておられます。

ダニエルの神は、ダニエルを獅子の穴から救い得る神であるということが分かります。

ダニエル書 6章19節、20節

王は夜明けに日が輝き出すとすぐ、獅子の穴へ急いで行った。その穴に近づくと、王は悲痛な声でダニエルに呼びかけ、ダニエルに言った。「生ける神のしもべダニエル。あなたがいつも仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」

ダニエルの神はこんにちでもなお私たちを獅子の穴から救うことができるのか、と疑っている人も或いはいるかもしれません。目に見える獅子は私たちをあまり襲わないでしょう。けれど、目に見えない悪魔は、吼えたける獅子のように私たちを取り巻き、襲ってきます。ダニエルと一緒に寝た獅子は、張子の獅子ではありませんでした。生きていた猛獣でした。私たちを取り巻く悪魔の攻撃、試み、戦いは、架空のものではありません。恐ろしい現実です。もし主が私たちを守ってくださらなかったなら、ダニエルは獅子に裂かれて死んでしまったでしょう。同じように主が私たちを守ってくださらなければ、私たちは恐るべき悪霊の攻撃に遭い、絶望し、間違った方向に導かれていくことでしょう。

ダビデの体験はどうだったのでしょうか。詩篇57篇を読むと、彼は次のように告白しています。一つの証しでもあります。

詩篇 57篇4節

私は、獅子の中にいます。私は、人の子らをむさぼり食う者の中で横になっています。彼らの歯は、槍と矢、彼らの舌は鋭い剣です。

7節

神よ。私の心はゆるぎません。私の心はゆるぎません。私は歌い、ほめ歌を歌いましょう。

ダビデ王は憎しみのただ中、むさぼり食う獅子の中に身を横たえました。けれどついに7節のように、勝利の叫びをあげることができました。あなたにとって、あなたの家族は獅子の穴のようかもしれません。あなたは家にいると、イエス様の御名のゆえに一致と平和がなく、居にくいかもしれません。どうしてでしょうか。イエス様の答えは、マタイ伝10章に書かれています。

マタイの福音書 10章34節から39節

わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません。わたしは、平和をもたらすために来たのではなく、剣をもたらすために来たのです。なぜなら、わたしは人をその父に、娘をその母に、嫁をそのしゅうとめに逆らわせるために来たからです。さらに、家族の者がその人の敵となります。わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者

は、わたしにふさわしい者ではありません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。自分のいのちを自分のものとした者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失った者は、それを自分のものとします。

主を第一にすると損をしません。

職場は獅子の穴のようかもしれません。ダニエルのように妥協せず、常に職場にあっても主に仕えていくなら、本当に幸いです。もし悪魔がこのダニエル書6章24節のようにあなたにささやいて来たらどう答えましょう。即ち、「あなたがいつも仕えている神は獅子の穴から救うことができるか」と。次のように答えるべきです。「はい。主はできます。主は救うことができになるだけではなく、救いたいです。たとえ、主は私を獅子の穴から救い出されなくても、栄光の体に引き上げてくださいます」と。

もう少し、周りの、ほかの獅子の穴について考えましょうか。

その一つは、ヘブル書に次のように書かれています。かつての、主を第一にした人々の経験についての箇所です。

ヘブル人への手紙 11章33節から39節

彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士となり、他国の陣営を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざげられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、——この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。

そうであったとしても、妥協せず、主を第一にしてみことばにだけに頼ったのです。

今読みました箇所を見ても、今まで主の御名のゆえに殺された多くの人々について書かれています。彼らの経験したことは、まさに獅子の穴そのものでした。彼らは拷問の苦しみに甘んじ、少しの妥協もせず、常に主に仕えてきました。これらの人々に、前に読みましたダニエル書6章20節を尋ねると何と答えるでしょうか。彼らは喜んでローマ書8章37節のように言うに違いありません。即ち、

ローマ人への手紙 8章37節

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。

病気も、一つの獅子の穴ではないでしょうか。多くの主にある兄弟姉妹は、病になり、数週間、数箇月、数年間と床の上に寝たきりで、良くなる望みのない闘病生活を続けています。これらの人々は、この世の望みは結局何も役に立たないのです。そのような人々は本当にさびしくて孤独ですが、主はそれらの兄弟姉妹の喜びであり、また抛りどころとなっておられます。これらの兄弟姉妹に、ダニエル書6章20節を尋ねると、何と答えるのでしょうか。彼らは必ずダビデのように答えるでしょう。詩篇103篇1節からのように。

詩篇 103篇1節から5節

わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。聖なる御名をほめたたえよ。わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。主は、あなたのすべての咎を赦し、あなたのすべての病をいやし、あなたのいのちを穴から贖い、あなたに、恵みとあわれみとの冠をかぶらせ、あなたの一生を良いもので満たされる。あなたの若さは、わしのように、新しくなる。

もう一つの穴があります。死という獅子の穴です。何と多くの主を信じる者が既にこの穴を通して行ったことでしょうか。死を克服されたイエス様を知るようになり、彼らが死ぬ寸前に、私たちがその枕辺に立ってその心を尋ねるなら、何と答えるのでしょうか。必ず、コリント第一の手紙15章54節のみことばをもって答えるでしょう。

コリント人への手紙・第一 15章54節後半から57節

「死は勝利にのまれた。」とするされている、みことばが実現します。「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」死のとげは罪であり、罪の力は律法です。しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

私のひいおばあさんが死ぬとき、その部屋は真っ暗でした。けれど死ぬ寸前、ひいおばあさんの顔は真昼の日のように明るくなり、主の栄光を見る、と言って死にました。私の母はその素晴らしい死の情景を見て、イエス様を信じるようになりました。

多くの人々はスイスのベアテンベルクに行きました。このベアテンベルク神学校の校長先生が召されるときも、素晴らしい情景でした。召されるとき、「私は主の声を聞くことができる。主が見える。罪の赦しは栄光の冠だ」と言って、息を引き取られました。やがてイエス様が来られるとき、御名のゆえに殺されたすべての人々、病で死んだ兄弟姉妹、迫害されて死んだ信じる者はみな、獅子の穴から引き上げられ、甦らされ、主のみもとで大いに喜ぶようになります。

コリント人への手紙・第一 15章51節、52節

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

同じ内容の記事は、いわゆる空中再臨の箇所です。

テサロニケ人への手紙・第一 4章13節から18節

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずで、私たちは主のみことばのとおりに言いますが、主が再び来られるときまで生き残っている私たちが、死んでいる人々に優先するようなことは決してありません。主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。こういうわけですから、このことばをもって互いに慰め合いなさい。

「眠った人々」、先に死んだ人のことです。

ダニエルのように、常に主にだけ仕えたいと望む者は豊かに祝福されます。ダニエルの特徴は、幼子のような信仰、定まった心、目の前に一つのはっきりとした目標を持っていたことです。少しの妥協をすることもせず、ダニエルの証しは素晴らしい影響を周囲に及ぼしたでしょう。異邦人の王でさえも告白したのです。「ダニエルの神」と言って、結局主をほめたたえました。王は自らダニエルの神を知りたいという餓え渴きを持ったばかりではありません。全国に、全世界に命令を書き送って、ダニエルの神を恐れるように命令したのです。簡単な提案ではなく、はっきりとした命令でした。

ダニエル書 6章25節から27節

そのとき、ダリヨス王は、全土に住むすべての諸民、諸国、諸国語の者たちに次のように書き送った。「あなたがたに平安が豊かにあるように。私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

ダニエルを妬んで迫害した人々はみな、穴に投げ入れられるようになりました。その人たちだけではなく、妻も子も噛み裂かれて死んだ、と聖書に書かれています。

もし、今日私たちが主に新しくすべてをささげ、特に私たちの意志を主にささげて仕えるなら、私たちの家族も、周囲の人々も、主のみ救いにあずかるようになるに違いありません。ですから、心から主にだけ仕える者になりましょう。

了